

2017年度 自己点検・評価【社会学研究科】

C票

<目標、行動計画>進捗確認シート

提出日：2018年2月22日

2021年度に向けた教育研究目標

責任者	社会学研究科委員長	作成部局	社会学研究科
-----	-----------	------	--------

【A票：教育研究目標1】

(タイトル)

研究方法や研究対象の専門分化にもとづきながら、それらを総合的に応用し、複雑化する現代社会を分析できる人材を育成する。

(狙い内容)

社会学・社会心理学的研究は、研究方法(理論的研究、実証的研究、量的研究、質的研究など)や研究対象によって、ますます専門分化が進んでいるが、このような専門分化にもとづきながら、それらを総合的に把握することのできる力を身につけることによって、複雑化する現代社会を総合的に分析できる人材を育成する必要がある。

1. 教育研究目標を実現する上での2021年度のめざす姿(目標)

研究方法(理論的研究、実証的研究、量的研究、質的研究など)や研究対象による専門分化に応じた、幅広くかつ系統的な専門的教育プログラム、およびそれらを総合的・全体的に把握し、複雑化する現代社会を総合的に分析するための教育プログラムを整備するとともに、充実した教育環境(社会学研究科と先端社会研究所との連携事業である大学院生サポートプログラムGSSPIによる大学院生個人および相互の自主的学習・研究活動のサポート)が整備される。

2. 達成度評価

評価指標	この教育目標は、研究科の教育のいわば方向性を示すものであり、その達成度を直接的かつ数量的に測定できる種類のものではない。むしろ、この教育目標を達成するための、さまざまな教育活動(下記の行動計画)の向上を示す指標によって、代替すべきものである。	評価尺度	A : B : C : D :
------	---	------	--------------------------

3. 年度毎の目標値

		2015年度	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度
2016年度 自己点検・評価時点								
2017年度 進捗状況 & 今後の 目標値	評価 尺度: A~D							
	見込・ 実績・ 目標 (値又は 状況)							

【2017年度の進捗状況について】

2017年度は、2016年度と同様の行動計画・評価指標・評価尺度にて遂行中であり、順調な進捗状況である。なお、行動計画①については、本研究科のカリキュラムにおいて根幹となる制度であり、大学院生への指導上必要不可欠である。つまり、目標を達成する上で欠かせない制度であり、またこれは評価尺度の設定に馴染むものではなく、現行制度を引き続き十分に機能させることに意味がある。行動計画④の評価尺度については、大学院生数や研究員によって構成される関係上、50名以上を最大値とすることは妥当である。なお、評価尺度が毎年Aであるのは、毎年継続的な広報活動により達成している結果である。行動計画⑤の評価尺度については、本研究科としてはサポート内容(論文執筆・投稿・学会発表等に関する指導・アドバイス)やスケジュールの観点から10回が適切であると、毎年10回開催している状況であるため、評価尺度の設定は適切であると判断する。

2017年度 of 取組み状況の確認

2017年度 of 取組みは、当初の目標どおりに進んでいるか？	→	はい・いいえ
---------------------------------	---	--------

※上記の目標、行動計画の進捗に関する参照URL【任意】

<http://kgsoc.blogspot.jp/>

<評価専門委員・第三者評価結果> 2017年12月22日公示

- ・ 順調に進展しています。(A)
- ・ 順調です。(C)
- ・ 行動計画②を除いて「A」を達成しているようですので、より高次の目標や目標値の設定が望まれます。(D)
- ・ 各行動計画の進捗状況から、目標は順調に進捗しているものと推察されます。
- ・ 行動計画①で指標としている指導体制の現状維持と継続については尺度にあらわさないまでも、そのための取り組みについての説明があれば、研究科の不断の努力が伝わります。
- ・ 行動計画②～⑤については、人数、回数に加え、質や内容の充実度について把握し、計画の適切性も検証されることが期待されます。(E)
- ・ 量的評価指標がなじまないということですので、質的な評価指標を設定してください。(F)
- ・ 『KG社会学批評』への投稿、「研究成果発表会」の開催、「大学院生サポートプログラムセミナー」の開催のいずれについても、活性化への努力がなされているものと評価できます。とくに「研究成果発表会」への参加人数の多さは、大学院のプログラムへの高い関心を裏付けるものとして、評価できます。(H)
- ・ 未設定となっているところに、評価尺度の設定があるとより良いと思われれます。(J)

【A票:教育研究目標2】

(タイトル)

論文執筆や外国語によるプレゼンテーションのための教育プログラムによって、国際的に通用する研究に貢献できる人材を育成する。

(狙い内容)

論文執筆の技能を向上させるとともに、外国語によるプレゼンテーションや論文執筆を指導することによって、日本国内においてばかりでなく、国際的に活躍できる人材を育成する。

1. 教育研究目標を実現する上での2021年度のめざす姿(目標)

論文執筆の技能を向上させるとともに、外国語によるプレゼンテーションや論文執筆を指導することによって、日本国内においてばかりでなく、国際的に活躍できる人材を育成する。

2. 達成度評価

評価指標	この教育目標は、その達成度を直接的かつ数量的に測定できる種類のものではない。むしろ、この教育目標を達成するための、さまざまな教育活動(下記の行動計画)の向上を示す指標によって、代替すべきものである。	評価尺度	A : B : C : D :
-------------	---	-------------	--------------------------

3. 年度毎の目標値

		2015年度	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度
2016年度 自己点検・評価時点								
2017年度 進捗状況 & 今後の 目標値	評価 尺度: A~D							
	見込・ 実績・ 目標 (値又は 状況)							

【2017年度の進捗状況について】

2016年度は行動計画①～③の3本柱により、十分に人材育成のための体制にて実施できたと考える。2017年度は引き続き継続的かつより積極的な院生への働きかけ(研究科委員会において指導教員から院生への周知依頼)を行なっていることにより、各行動計画においても順調な進捗状況である。なお、行動計画①については、オーストラリア国立大学セミナーへの派遣が2016年度をもって終了し、セミナーへの派遣による「英語プレゼンテーションの実践力を身につける機会」を設ける必要性があったが、先端社会研究所との連携のもと、2017年度中に新たにメルボルン大学アジアインスティテュートとの学术交流が可能となり、結果として2017年8月下旬に大学院生をセミナーへ派遣することができた。さらに、先端社会研究所とメルボルン大学アジアインスティテュートとの間で協定が締結され、今後も先端社会研究所との連携のもとにセミナーへの派遣の継続が可能となった。したがって、引き続き行動計画①～③の体制により継続的に進めていく。

2017年度の取組み状況の確認

2017年度の取組みは、当初の目標どおりに進んでいるか? → はい ・ いいえ

<評価専門委員・第三者評価結果> 2017年12月22日公示

- ・ 順調に進展しています。(A)
- ・ 順調です。(C)
- ・ 行動計画①と②に関しては改善が進んでいますが、③についてはさらなる進展が望まれます。(D)
- ・ 順調に進捗しています。(F)
- ・ 順調に進展しています。(G)
- ・ メルボルン大学アジアインスティテュートに大学院生をセミナーへ派遣することができたことは具体的な成果として評価できます。今後はさらに、国際学会での発表や外国語での論文執筆数などを指標に設定することも必要かと考えます。(H)
- ・ 国際的に通用する研究に貢献できる人材育成は順調に進展しています。(I)
- ・ 達成度評価にも、評価指標と評価尺度の設定があるとより良いと思われれます。(J)

【A票:教育研究目標3】

(タイトル)

博士学位(課程博士)取得に至るまでの段階・プロセスをモデル化するとともに、「博士学位キャンディデート」を授与することによって、博士学位(課程博士)の取得を促進する。

(狙い内容)

学位取得の段階・プロセスをモデル化することによって、論文や学会発表を積み重ねながら、それらを学位論文の執筆へとつなげていくことが可能になる。また「博士学位キャンディデート」の授与は、一定の条件を設けることによって、学位論文執筆に先行する目標となるとともに、授与後に(学位論文提出までの)期限を設けることによって、学位論文の提出を促進し動機づけるものである。

1. 教育研究目標を実現する上での2021年度のめざす姿(目標)

博士学位(課程博士)取得に至るプロセス・モデルが浸透し、これを指針に、「博士学位キャンディデート」の取得、博士学位論文の提出、博士学位(課程博士)の取得へと進むことが定着する。

2. 達成度評価

評価指標	「博士学位キャンディデート」および博士学位(課程博士)の取得者数	評価尺度	A : 3名以上 B : 2名 C : 1名 D : 0名
-------------	----------------------------------	-------------	--

3. 年度毎の目標値

		2015年度	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度
2016年度 自己点検・評価時点		A 8名	A 4名	B 2名	B 2名	B 2名	A 3名	A 3名
2017年度 進捗状況 & 今後の 目標値	評価 尺度: A~D	A	A	見込み	A			
	見込 実績・ 目標 (値又は 状況)	8名	4名		7名			

【2017年度の進捗状況について】

目標を達成するための行動計画については適切であり、内容等に変更はない。ただし、「博士学位キャンディデート」の授与要件について、従来から大学院生の中で「キャンディデート授与=博士学位(甲号)申請論文提出基準」という誤解が散見され、必ずしも大学院生に十分に浸透しているとは言い難い状況であった。そこで、その状況を改善するため、2016年度末から2017年度にかけて、「博士学位キャンディデート」授与要件における論文基準を「博士学位(甲号)申請論文提出基準」と同一にし、その関係性を明確にするとともに大学院生により一層エンカレッジする仕組みを整備した(2017年4月社会学研究科委員会承認)。したがって、2016年度より行動計画等に変更はないが、その中身がより充実した内容になっている。なお、2017年9月の時点で、この新たな「博士学位キャンディデート」授与要件のもと、1名の授与者が出ている。

2017年度の取組み状況の確認

2017年度の取組みは、当初の目標どおりに進んでいるか?	→ はい・いいえ
------------------------------	----------

<評価専門委員・第三者評価結果> 2017年12月22日公示

- ・ 順調に進展しています。(A)
- ・ 「博士学位キャンディデート」授与要件における論文基準と博士学位(甲号)申請論文提出基準を同一にして、その関係性を明確にしたことは、評価できます。(B)
- ・ 順調です。(C)
- ・ 行動計画①の進捗状況を具体的に記すことが望まれます。(D)
- ・ 博士学位取得に向けた特徴的な取り組みは評価できます。キャンディデートの授与要件について検証され、仕組みを整備することでより充実した内容となり、成果が出ていることは、PDCAが有効に機能していると言えます。(E)
- ・ 既に十分に目標達成していますので、目標設定から次の段階に進まれることも考えられます。(F)
- ・ 「博士学位キャンディデート」の推進は、ユニークな試みとして評価できます。現段階ですでに目標数値を上回っているのは、喜ばしいことです。今後も着実に博士学位取得学生が増えることが期待できます。(H)